

保健体育科

社会情緒的コンピテンスの向上に着目した カリキュラム・マネジメント

川端 美穂・小田 成一・岩谷 諭

1 主題設定の理由

(1) 共通研究主題との関連

本校では、「中学校学習指導要領解説保健体育編」で示された「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つ資質・能力のうち、これまであまり研究してこなかった「学びに向かう力・人間性等」に着目している。そして、「学びに向かう力・人間性等」とは自ら学び続ける力であり、それを育むためには、学習することの重要性や価値観を理解することが重要だと考えている。これらのことから、本校では、「学びの意義を理解し自ら学び続ける生徒を育成するカリキュラム・マネジメント」という共通研究主題を設定し、「学びの意義」と「学びに向かう力・人間性等」について、各教科で検討してきた。

それでは、体育における「学びの意義」と育むべき「学びに向かう力・人間性等」とはどのようなものであろうか。まず、「学びの意義」としては、体力や技能の向上、心身の健康の保持増進、忍耐力や自制心、社会性の向上といった運動による効果があげられる。これらの効果については、体育理論や保健分野でも学習することであり、生徒の運動への動機づけを高める条件の1つであると言える。しかしながら、運動の効果を理解することだけで自ら学び続けるようになると言えるのだろうか。

一般的に、私たちが運動する理由にはさまざまなものがあり、健康やストレス解消、美容といった効果や、職業やつきあいといった対価や義務を得ることの他に、運動が好きだからという理由がある。本校の保健体育科では、生涯スポーツの獲得を目指す現在の学校体育において、運動の持つおもしろさや楽しさを十分に味わい、運動が好きになることこそ重要であると考えた。そこで、体育における「学びの意義」を、運動の持つおもしろさや楽しさを十分に味わうことと捉えることにした。

続いて、体育で育むべき「学びに向かう力・人間性等」については、これまでの研究との関連から以下のように捉えることにした。

(2) これまでの研究との関連

本校の保健体育科では、平成28年度より、「学びに向かう力、人間性等」を「非認知スキル」と捉え、ストレスを抱える生徒が多いという実態から、ストレスからの回復力であるレジリエンスに着目してカリキュラム・デザインを検討してきた。その結果、バレーボールやハンドボール、バスケットボールといった集団種目においては、さまざまなカリキュラム・デザインを施したにもかかわらず、レジリエンスの変容に大きな個人差が見受けられ、有意な向上が認められる項目が少ないものの、水泳や柔道、マット運動、バドミントンといった個人種目においては、楽しさを実感できるようにカリキュラム・デザインを施したり、課題に粘り強く取り組むことができるようにカリキュラム・デザインを施したりすることがレジリエンスを向上させることが示された。これは、レジリエンスとは、ストレスに対して個人で対処する力であることと関係している。すなわち、集団種目に比べ個人種目においては、記録の向上や勝敗の結果といった自身の努力の成果を実感しやすいため、個人で対処する力であるレジリエンスがより顕著に向上したと考えられる。このことは、集団種目においては、他者と関わる「非認知スキル」にも着目することの必要性を示している。

ところで、「非認知スキル」と同義の概念に、「社会情緒的コンピテンス」がある。これは、自己と社会性に関わる有能さについて広くとらえる概念であり、本研究では、他者と関わる力を調査することから、「社会情緒的コンピテンス」という表現を用いる方が適切であると思われる。

(3) 生徒の現状と課題

本校2年生180名を対象に行ったアンケート結果から、体育の授業を楽しんでいる生徒は90%以上いるにも関わらず、運動が得意という生徒は30%未満である。体育の授業を楽しめないと答えた生徒の全員が、運動が苦手な生徒であり、体育の授業が楽しくない理由として、「運動が苦手でうまくできないから」「周りに迷惑をかけるから」と答えていた。このことは、運動の技能の高低に関わらず、体育が楽しいと感ずることができる指導の工夫の必要性を示している。

また、人間関係のトラブルやストレスなどから精神的に不安定であったり、悩みを抱えていたりする生徒が増えている。そういった生徒の中には、自分の意見を伝えることや他者と協力することなどに苦手意識を持っている生徒も少なくない。体育は、他者と関わる活動が多く、自分の意見を伝えたり他者と協力したりする力を伸ばすことができる教科であると言える。

以上のことから、本校の保健体育科では、「社会情緒的コンピテンスに着目したカリキュラム・マネジメント」を研究主題とし、集団種目において「仲間の学習の援助」や「話し合い」、「互いの良いところを伝える」といった活動が社会情緒的コンピテンスにどのように作用するかを調査することにした。

2 目指す生徒像

本校保健体育科では、保健体育の授業を通して、他者への関心を高め、互いに認め合い尊重し合うことのできる生徒の姿を目指している。

3 研究計画

- ①対象生徒 本校第2学年
- ②研究期間 令和2年11月、令和3年1月～2月
- ③単元 ダンス・バスケットボール
- ④検証方法 同一生徒を対象に、単元の前・後で社会情緒的コンピテンスの一つに含まれる性格的特性を調査することとした。性格的特性の測定尺度には様々なものがあり、本研究では、世界的に広く研究されているGoldbergの主要5因子性格検査（外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性）を採用し、村上（1997）「主要5因子性格検査の尺度構成」の測定尺度を用いて検証を行った。その際、生徒の負担を考慮し、外向性と協調性の2因子のみを測定することとした。外向性と協調性を選択した理由は、本校生徒の実態やスポーツの場面では、他者とのかかわる場面が多いことと、私たち保健体育科の教員が体育の中で生徒に身につけてもらいたい資質・能力と考えているからである。

4 実践の概要

表1は、外向性尺度と協調性尺度の24項目について、ダンスとバスケットボールの2種目の単元の前・後で測定した得点の平均値と対応のあるt検定の結果を示している。得点化については項目ごとに4件法で回答を求め、「そう思う＝4点」「やや思う＝3点」「あまり思わない＝2点」「全く思わない＝1点」と換算し、2つの下位尺度の得点を算出した。そして、外向性尺度と協調性尺度の24項目の得点の合計も算出した。なお、否定的な項目に関して、得点が下がっている数値は改善を示している。また、外向性、協調性、外向性と協調性の合計得点に関しては、得点が高いほど肯定的な状況であることを示すように否定的な項目の得点を「そう思う＝1点」「やや思う＝2点」「あまり思わない＝3点」「全く思わない＝4点」と換算した。

表1 ダンスとバスケットボールの単元の前後での外向性と協調性の得点

		ダンス 測定結果			バスケットボール 測定結果		
		事前(平均)	事後(平均)	t値(df=171)	事前(平均)	事後(平均)	t値(df=171)
外向性尺度	1 ほかの人と比べると話し好きです	3.17	3.20	0.52	3.13	3.30	3.40 **
	2 元気が良いと人に言われます	2.94	2.97	0.70	2.97	3.12	3.13 **
	3 どちらかと言うとにぎやかな性格です	2.92	2.99	1.49	2.92	3.10	3.71 **
	4 ほかの人と比べると活発に行動する方です	2.84	2.88	0.77	2.80	2.97	3.23 **
	5 積極的に人と付き合う方です	2.93	3.10	0.96	2.88	3.03	2.67 **
	6 ほかの人と同じようにすぐに友達ができる方です	2.84	2.87	0.65	2.80	2.96	3.04 **
	7 どちらかと言うとおとなしい性格です	2.27	2.26	0.21	2.30	2.30	0.11
	8 あまり自分の意見を主張しない方です	2.33	2.32	0.08	2.36	2.24	1.92 +
	9 どちらかと言うと引っ込み思案です	2.30	2.15	2.76 **	2.23	2.15	1.57
	10 人前で話すのが苦手です	2.73	2.58	2.36 *	2.66	2.70	0.66
	11 どちらかと言うと地味で目立たない方です	2.30	2.20	1.80 +	2.31	2.23	1.43
	12 どちらかと言うと無口です	1.97	1.86	2.09 *	2.02	2.01	0.22
協調性尺度	13 思いやりのある方です	2.83	2.87	0.82	2.86	2.92	1.08
	14 子どもや老人の世話をするのが好きです	2.68	2.74	0.94	2.72	2.73	0.11
	15 誰にでも親切にするように心がけています	3.16	3.26	1.93 *	3.21	3.31	2.10 *
	16 みんなでできたことは、できるだけ協力しようと思います	3.43	3.45	0.53	3.34	3.60	5.67 **
	17 人助けのためならやっかいなことでもやります	2.87	2.99	2.16 *	2.83	3.09	5.05 **
	18 どちらかと言うと人情にあつい方です	2.70	2.75	0.83	2.74	2.80	1.01
	19 いつも人の立場になって考えるように心がけています	3.01	3.04	0.62	3.03	3.19	2.96 **
	20 誠実に仕事をしていてもあまり得にはなりません	2.24	2.08	2.78 **	2.12	1.99	2.07 *
	21 人の言葉には裏があるのでそのまま信じない方が良いと思います	2.85	2.55	4.82 **	2.40	2.26	2.11 *
	22 みんなで決めたことでも自分に不利になる場合は協力したくありません	2.23	2.13	1.49	2.10	1.95	2.67 **
	23 人から親切にされると何か下心がありそうで警戒しがちです	2.05	1.92	2.27 *	1.94	1.90	0.65
	24 親しい仲間でも本当に信用することはできません	1.91	1.77	2.32 *	1.78	1.73	0.75
外向性		33.8	34.6	2.81 **	33.6	34.8	4.38 **
協調性		34.4	35.7	4.35 **	35.4	36.8	5.37 **
外向性+協調性		68.1	70.3	4.63 **	69.0	71.6	6.17 **

**: $p<0.01$ *: $p<0.05$ +: $p<0.1$

(1) ダンスの授業実践について

一般的にダンスは、仲間とともに感情を込めて踊ったり、イメージを捉えて自己を表現したりすることを楽しむや喜びを味わうことのできる運動である。中学1・2年生のダンスの授業では、単元を通して師範や動画に合わせて踊り、基本となる動きや振付を練習する中で、生徒は技能の習得や表現をすることができる。しかし、このような活動において、生徒が自ら考えて表現することや、仲間と協力して創作する機会はいくつかない。そこで、本研究では、基本技能の練習を短く設定し、話し合い活動を通して、自分の意見を伝えることや表現すること、互いの良いところを伝えることをねらいとし、グループ活動を多く取り入れた。本単元は8時間で、第2学年を対象とした男女共習の授業であった。

その結果、授業の前後で得点に有意差が認められた項目は、外向性尺度の「どちらかと言うと引っ込み思案です」「人前で話すのが苦手です」「どちらかと言うと無口です」であり、いずれも改善を示すものであった。また、「どちらかと言うと地味で目立たない方です」も改善の傾向が見られた。外向性尺度の得点は、事前33.8点、事後34.6点となり、 t 検定の結果、1%の優位水準で得点の向上が認められた。このことは、

ダンスの授業は生徒の外向性を改善させる効果があることを示している。また、協調性尺度では、「誠実に仕事をしていてもあまり得にはなりません」「人の言葉には裏があるのでそのまま信じない方が良いと思います」など6項目に改善が見られた。協調性尺度の得点は、事前 34.4 点、事後 35.7 点となり、 t 検定の結果、1%の優位水準で得点の向上が認められた。このことは、ダンスの授業は生徒の協調性を改善させる効果があることを示している。そして、二つの下位尺度の合計点は、事前 68.1 点、事後 70.3 点となり、1%の優位水準で得点の向上が認められた。(表 1)

続いて授業者のねらいが、外向性と協調性にどのような作用をもたらせたのかを考察する。まず、外向性を高めるために、本単元では、話し合いを通して、自分の意見を伝えることや表現することを授業者のねらいとし、グループ活動を多く取り入れた。対象の学年は、人前に出ることが苦手な生徒が多く、ダンスに対してネガティブな印象を持っている生徒が多いことが事前調査から分かった。本単元では、単元の初めに 20 分ほどの時間を使い、生活班で約 30 秒の振付を考え、クラス内で発表会を行った。その時には、やはり恥ずかしがる生徒が多く、自分をさらけ出して表現することが難しい様子であった。そこで、発表会に向けて創作活動に入る前に、各クラスの発表会の様子を撮影した動画を鑑賞する時間を設けた。生徒からは「恥ずかしがっているのが一番恥ずかしい」「大きな動きをしている方がカッコいいし面白い」という感想が多くあり、堂々と表現すること、表現の工夫が大切であることに気付く生徒の様子が見られた。この活動が「どちらかと言うと引っ込み思案です」「どちらかと言うと地味で目立たない方です」の項目の改善につながったのではないかと考えられる。また、ダンスを創作する際、「観客を楽しませるためにはどのようなダンスをするのがよいのか」という問いを設定した。これによって、他者意識が高められ、自分だけが楽しむのではなく、その場にいるすべての人が楽しめるダンスを目指し、話し合いをする姿が授業者の観察からうかがえた。生徒の感想には、「同じグループの人ときちんと自分の意見を伝えあってダンスを創ることが大切」「人と協力するには、言われたことをこなすだけではなく自分の意見も出しながら作っていくことが大切」「ダンスの授業を受ける前より、人前に出ることに対して恥ずかしさがあまりなくなった」などの記述が多くあげられ、自分の意見を伝えることや表現することに成長を感じた生徒が多かった。このことは「人前で話すのは苦手です」「どちらかと言うと無口です」の項目の改善と関連付けて考えることができる。これらのことから、外向性を高める授業者のねらいが概ね達成できたと言える。

次に、協調性を高めるために、本単元では、お互いの良さを認め合い、称え合う姿をねらいとし、発表会や鑑賞会を行った。先述したとおり、単元の初めにミニ鑑賞会を行ったことで自分たちの課題や目指す姿が明確になり、発表会に向けての話し合いや創作活動が活発になっている様子が授業者の観察に記録されている。グループ活動では、ダンスを創作するために ICT を活用しながら、曲を選び、動画を見て教え合ったり、振付を練習したりしていた。このような仲間の学習を援助し、発表会に向けてより良いダンスを創りだそうとする活動が、「誠実に仕事をしていてもあまり得にはなりません」「人助けのためならやっかいなことでもやります」「誰にでも親切にするように心がけています」の項目の改善につながったのではないかと考えられる。生徒の感想にも、「仲間と協力して一つのものを創り上げることで達成感を感じた」「みんなと一緒に踊ったり考えたりする楽しさを実感した」「仲間と一緒に何かを考えること、何かを達成するために話し合うことが、どれだけ楽しいのか強く感じる事ができた」など仲間との連帯感や協力に対する意見が多くあり、お互いの良さを認め合い、称え合う姿が協調性の向上に効果があることがうかがえる。生徒の感想には単元の終わりに行った発表会や鑑賞会についての記述も多く、「グループ同士で見合っていると、お互いの良い所も悪い所も見えて楽しいし、逆に自分が発表していると、人から見られる楽しさが分かったりして面白かった」「ダンスはする側も見る側も楽しむことができると感じた」「ダンスを見合うことで面白い振りつけなど、新たな発見があって楽しかった」など鑑賞することで、他者を認め合い称え合うことができたことがうかがえる。授業者の観察でも、どのクラスも和やかな雰囲気、盛り上がり、笑顔で見守ったり、クラス全体で手拍子や歓声で称える姿が記録されている。これらのことから、お互いの良さを認め合い、称え合うために、グループ活動を充実させることや、発表会や鑑賞会をすることが有効であると考えられる。しかしながら、中にはぎりぎりまで曲や振付が決まらず、仲間押し付け、一人ひとりが役割を果たしていないグループもあった。このようなグループの生徒は、ダンスを踊る楽しさや、仲間との連帯

感を感じることが難しかったようであった。このことについては、参考となる動画などの提供や、他のグループを観察できる交流会をするなど、グループ活動を活発にさせる教師の手立てが必要であることを示している。また、本単元では、創作時間や練習時間など発表会に向けて取り組む授業時間数が3時間であった。そのため、早く曲や振付が決まったグループと最後までまとまらなかったグループとでは、練習時間に大きな差があり、後者のグループはほとんど練習ができていなかった。このことから、練習時間の設定が妥当であるかという点についても今後の課題として検討していく必要がある。

以上のことから、外向性や協調性を高めるためには、発表会や鑑賞会を通して、目標や課題を明確にし、生徒が自己を表現することや、お互いの良さを伝える活動などを取り入れる授業構成が望ましいのではないと言える。さらに、授業者は生徒の進捗状況を把握し、適宜助言や中間交流会をすることが、お互いに意見を伝え合う姿や賞賛する姿の育成、ひいては外向性や協調性を高めることにつながるのではないかと考えた。

(2) バasketボールの授業実践について

学習指導要領では、球技領域において、「学びに向かう力・人間性等」を身に付ける活動として「積極的に取り組むこと」と「仲間の学習を援助しようとする」ことを示している。さらに、前回研究では、仲間と協力しながら課題に取り組み、その課題を達成できるような指導の工夫の必要性を示唆していた。以上のことを踏まえ本単元では、仲間の学習の援助、互いの良いところを伝えるといった活動を取り入れた。(表2) また、事前アンケートで「ボールが怖い」と答える生徒が多くいたため、Basketボールを「スマイルボール」と呼ばれる柔らかい素材の6号ボールに変えて行った。本単元では、仲間の学習の援助し、賞賛するなどの声かけを積極的に行うことをねらいとし、ペアやグループ活動を多く取り入れ、互いのプレイを見て、アドバイスや賞賛ができるように兄弟チームを取り入れた。単元の長さは6時間で、第2学年を対象にした男女共習の授業であった。

その結果、授業の前後で得点に有意差が認められた項目は、外向性尺度の「ほかの人と比べると話し好きです」「元気が良いと人に言われます」「どちらかと言うとにぎやかな性格です」など6項目であり、改善を示すものであった。また、「あまり自分の意見を主張しない方です」にも改善の傾向が見られた。外向性尺度の得点は、事前33.6点、事後34.8点となり、 t 検定の結果、1%の優位水準で得点の向上が認められた。このことは、Basketボールの授業は生徒の外向性を改善させる効果があることを示している。また、協調性尺度では、「誰にでも親切にするように心がけています」「みんなできめたことは、できるだけ協力しようと思います」「人助けのためならやっかいなことでもやります」「いつも人の立場になった考えるように心がけています」など7項目に改善が見られた。協調性尺度の得点は、事前35.4点、事後36.8点となり、 t 検定の結果、1%の優位水準で得点の向上が認められた。このことは、Basketボールの授業は生徒の協調性を向上させる効果があることを示している。そして、二つの下位尺度の合計点は、事前69.0点、事後71.6点となり、1%の優位水準で得点の向上が認められた。(表1)

続いて授業者のねらいが、外向性と協調性にどのような作用をもたらせたのかを考察する。まず、外向性を高めるために、本単元では、活動の中で互いの良いところを伝えたり、アドバイスをしたりするなど、積極的に声をかけ合う姿を授業者のねらいとし、兄弟チームを取り入れた。兄弟チームを取り入れたことで、話し合いの場を設定しなくても、練習中やゲーム中など活動中に積極的に声を出しながら学び合う姿が多く見られた。授業者の観察には、得意な生徒が積極的に声を出し、チームメイトに教える様子や、外野から声援をしている様子、プレイ中に自然と出る声が記録されている。生徒の記述には、「外野からの声で、自分だからパスを回してもらえないのではなく、自分のいる場所が悪いのだと改めて気付けた」「先生のアドバイスだけではなく、自分のチームと相手のチームとの作戦を自分なりに再現することでいつもとは違った達成感が得られた」「周りの人がアドバイスをしてくれたり指示をしてくれたりしてうれしかった」と言った記述が多くあり、多数の生徒が兄弟チームによる声かけや作戦によって新たな発見があったことがうかがえる。このような仲間に積極的に声をかけることは、「ほかの人と比べると話し好きです」「元気が良いと人に言われます」「どちらかと言うとにぎやかな性格です」の項目の改善に効果があるのではないかと推測

される。さらに授業者は、チーム練習やゲームを観察するときに賞賛するように定期的に助言した。これにより、仲間の良いプレイを認める声かけが増え、授業全体の雰囲気も良くなった。生徒の記述には、「運動ができ、一人でシュートしたり練習でもボールを独占するイメージがあった人と同じグループになったが、意外に練習の時もボールを回してくれたりメンバーにも気を使ってくれていた。その人のことを全然知らなかったんだと感じた」「バスケットにおける司令塔とは、盛り上げ上手で応援上手な人であると実感した」「チームのメンバーそれぞれにできることや、いいところがあり、みんながそれぞれの個性を生かせるようにすることの大切さに気付いた」と言った記述が多くあり、多数の生徒が賞賛の声によって、お互いの良さを認め合っていたことがうかがえる。これらのことから、活動の中で積極的に声をかけ合うために、兄弟チームは効果的であると推測できる。

次に、協調性を高めるために、本単元では、仲間の学習の援助することを授業者のねらいとし、本実践授業では、ペアやグループ活動を多く取り入れた。具体的には、シュート練習の際、ペアの人からパスをもらってシュートする活動や仲間の打ったボールをリバウンドキャッチしたり、グループで協力してリバウンド奪取したりする練習を行った。この生徒間の学習の援助によって、「一人だけがずっとボールを持ち続けるのではなく、みんながボールに触れることができるよう、思いやりを持ってプレイすることが重要だと学ぶことができた」「協力することの大切さや、人からパスをされたときの嬉しさが心に残っている」などと言った生徒の感想が多く、仲間と協力することの大切さを学んでいた様子がうかがえる。このことから、ペアやグループ活動の中で教え合ったり、補助し合ったりする活動が「みんなできめたことは、できるだけ協力しようと思います」「人助けのためならやっかいなことでもやります」「いつも人の立場になって考えるように心がけています」の項目の改善につながったと推測できる。また、本実践授業では、単元の後半から、ゲームの勝敗につながるプレイであるリバウンドを課題とし、練習やゲームを行った。リバウンドという課題を提示することで、苦手意識や恐怖心がある生徒も、自分のやるべきことが明確になり、ゴールの付近で積極的にプレイに参加し、チームで協力しリバウンドを取りに行っている様子が見られた。生徒の感想には、「誰かがシュートしたあとのリバウンドキャッチは一人では難しくチームメイトに委ねる、協力することの必要性を感じた」「シュートをしたりされた後に足を止めずにボールを取りに行くことが大切だと思った」「自分でリバウンドをとれなくても味方がいる方にボールをはいたりすることで、チームとしてボールを持つ時間が多くなってよかった」と言った記述が増えてきた。このような姿は、「みんなで決めたことでも自分に不利になる場合は協力したくありません」の項目の改善に関連しているのではないかと推測できる。

しかし、リバウンドを意識はしたものの、「どのような動きをすればよいのか」「良いリバウンドとは何か」が明確でなかったため、生徒のリバウンドに対する自発的な賞賛が少なかったように感じた。特に、ゲームの中では、得点が決まったときや、勝敗に対しての賞賛が多く、リバウンドの重要性が浸透していない様子が見られた。この漠然とした賞賛が、「人から親切にされると何か下心がありそうで警戒しがちです」「親しい仲間でも本当に信用することはできません」の項目に有意差が認められなかったことと関連しているのではないかと推測される。さらに、単元の後半では、勝敗にこだわるあまり、ネガティブな声かけも見受けられた。このような発言が増えると、苦手な生徒はプレイに参加しにくくなる様子も授業者の観察で記録されている。したがって、協調性を高めるためには、ペアやグループ活動を取り入れ、仲間の学習を援助することが有効であると言える。さらに、具体的な賞賛や、積極的なプレイを認めるなどのポジティブな声かけを増やす支援があれば、生徒はより安心してプレイに参加できるのではないかと考えた。

以上のことから、外向性や協調性を高めるためには、目標や課題を明確にし、仲間と活発に意見交換ができる活動や、積極的なプレイや良い所を賞賛する声かけを意識させる指導が有効であると言える。また、お互いに声をかけ合いながら行うことができるペアやグループ活動は、仲間からの学習援助が活発になり、生徒の協調性を高める活動になることが示唆された。その中で、生徒の自主性や教え合いに任せるだけではなく、具体的な姿を師範や動画などで提示することが、運動の苦手な生徒にとっては必要な支援であると考えた。さらに、より自発的で質の高い賞賛の声を増やす工夫があれば、誰もが楽しく活動できるのでは

ないかと考えられる。これらの手立てや指導の工夫によって、運動技能の高低に関わらず、誰もが積極的にプレイに参加しやすくなり、外向性や協調性をさらに高めることができるのではなかろうか。

表2 バスケットボール授業実践

本時案（第2次 第3時）		
目標	練習やゲームの中で、仲間のプレイを称賛したり、アドバイスしたりすることができる(主体的に学習に取り組む態度)	
学習活動	指導・支援と留意点	評価等
1 整列をして準備運動と挨拶を行う。	1 班隊形で準備運動と整列するように声をかける。	お互いの良さを認め合い、良いプレイをほめ合おう 主体的に学習に取り組む態度 リバウンドを取りに行こうしたり、それを称賛したりすることができる(観察・学習カード)
2 本時の活動内容と授業のめあてを確認する。	2 本時の活動内容とめあてについて理解を深めるために、パワーポイントで示しながら確認する。	
3 チームで練習を行う。 ・連続シュート ・リバウンドシュート ・ノックダウンゲーム	3 チームで協力して練習を行うように声をかける。 ・声を出してパスを受けてシュートすること ・高い位置でキャッチしてシュートすること ・シュートの後、素早くリバウンドを取りに行くこと	
4 チーム内でミニゲームを行う。(ハーフコート)	4 チーム内でミニゲームを行うことで、互いのよいプレイを称賛できるようにする。特にリバウンドを取りに行こうとすることを称賛するよう助言する。	
5 他チームとゲームを行う。(フルコート)	5 4のミニゲームで称賛したことを取り上げ、リバウンドなどの良いプレイをするよう指示する。また、試合に出ていないときは、味方チームのプレイを見て称賛したり、アドバイスしたりするよう指示する。	
6 本時の振り返りをする。	6 本時の学習内容の理解を深めるために、数名の生徒に発表させ、まとめる。	

5 成果と今後の取り組み

本研究では、集団種目において「仲間の学習の援助」や「話し合い」、「互いの良いところを伝える」といった活動が社会情緒的コンピテンスにどのように作用するかを調査することとし、ダンスとバスケットボールの2種目で、外向性と協調性を検証した。その結果、8時間のダンスと6時間のバスケットボールの単

元の前後で社会情緒的コンピテンスの 1 つの指標である外向性尺度と協調性尺度の向上が認められた。この結果から、ダンスやバスケットボールの授業は、生徒の外向性や協調性を育み、ひいては社会情緒的コンピテンスを向上させる効果があるのではないかと考えられる。

外向性が向上したことについて、アドバイスや賞賛と言った声かけを積極的に行うように助言した成果であると考えられる。特に、互いの良いところを伝えるといったポジティブな声かけは、生徒の学習意欲を高める作用があると授業者の観察記録や生徒の記述から示唆された。また本研究では、話し合いの場を設定しなくても、生徒は活動の中で積極的にアドバイスや声かけをしている姿が多く見られた。このことについても外向性の向上が影響しているのではないかと考えられる。

協調性が向上したことについて、仲間の学習の援助の効果によるものであると考えられる。本研究では、ペアやグループ活動を多く取り入れ、仲間と協力して課題を解決させる活動が多くあった。特に、バスケットボールの授業では、課題を達成するために、仲間と協力し、練習を工夫したり、作戦を考えたりしている様子が見られた。この活動によって、チームのみんなができるようになることや、みんなとできることに楽しさや喜びを感じ、集団種目において必要である協調性を高めることができたのではないかと推測できる。

一方で、ダンスでは創作時間が短かったこと、バスケットボールでは単元を通して明確な目標を意識させられなかったことが課題であった。このことは、目標や課題を達成させるための練習時間の確保や具体的な姿を提示するなどの指導の工夫の重要性を示しており、授業時数や授業構成、単元構成を検討する必要がある。このような工夫によって、生徒の外向性や協調性、ひいては社会情緒的コンピテンスのその他の指標の向上にも作用するのではないかと考えられる。

しかしながら、本研究で得られた外向性や協調性の向上が、授業づくりによるものか、ダンスや球技のもつ特性によるものか、あるいはこのほかの要因によるものかは特定できない。本研究の課題を踏まえ、ほかの種目においても調査することが今後の課題である。

〈引用・参考文献〉

- 1) 国立教育政策研究所 (2017) 『非認知的 (社会情緒的) 能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書』
- 2) 村上宣寛・村上千恵子 (1997) 『主要 5 因子性格検査の尺度構成』
- 3) 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 保健体育編』
- 4) 岡山大学教育学部附属中学校 (2018) 『研究紀要第 52 号, p p 89—98』
- 5) 岡山大学教育学部附属中学校 (2020) 『研究紀要第 55 号, p p 87—94』